

言語聴覚士 上田の餅田さん・松本の内藤さんが寄稿

# 吃音理解広げる一冊に

## 接し方支援者の立場から提案

言葉が滑らかに出てく「吃音」の子どもらへの接し方をまとめた書籍で、ともに言語聴覚士の餅田亜希子さん(52)と上田市と内藤麻子さん(51)と松本市が寄稿した「吃音のある子どもと家族の支援」(学苑社)が出版された。当事者が吃音を苦にせず楽に話せるように周囲がどう理解し、当事者に接すればいいか、支援者の立場から提案している。

本は、吃音が子育てや家庭環境によるものではないことを解説。語頭の音を「あ・あ・あ・あ」と繰り返す「連発」が当事者には自然な話し方で、そのまま安心して話せる環境づくりが大切だと強調している。

餅田さんは東御市の病院に勤務。寄稿では、連発を出さないように意識すると余計に話しづらくなる吃音の仕組みを、日頃から当事者や周囲に伝えていることを紹介。正しい知識を幼稚園・保育園、学校と共有する必要があるという。吃音の子どもへの支援は「どんな大人に育ってほしいか」という視点が大切」とする。

松本市内のクリニックに勤務する内藤さんは、小学校などで吃音について理解を広げる出前授業を続けている。寄稿では、当事者がどんな気持ちか考えることを授業で重視していると紹介。取材に「周りが吃音について知ることを通じ、子どもたちが人との違いを受け止めることにつながれば」と話す。

本は、関西外国語大短期大(大阪府)准教授の堅田利明さんと、九州大病院(福岡市)医師の菊池良和さんの編著。堅田さんは「本が、当事者や家族が安心して暮らしていけるきっかけになればいい」としている。178頁。税別1700円。



吃音の当事者や家族らの支援について寄稿した本を持つ内藤さん